

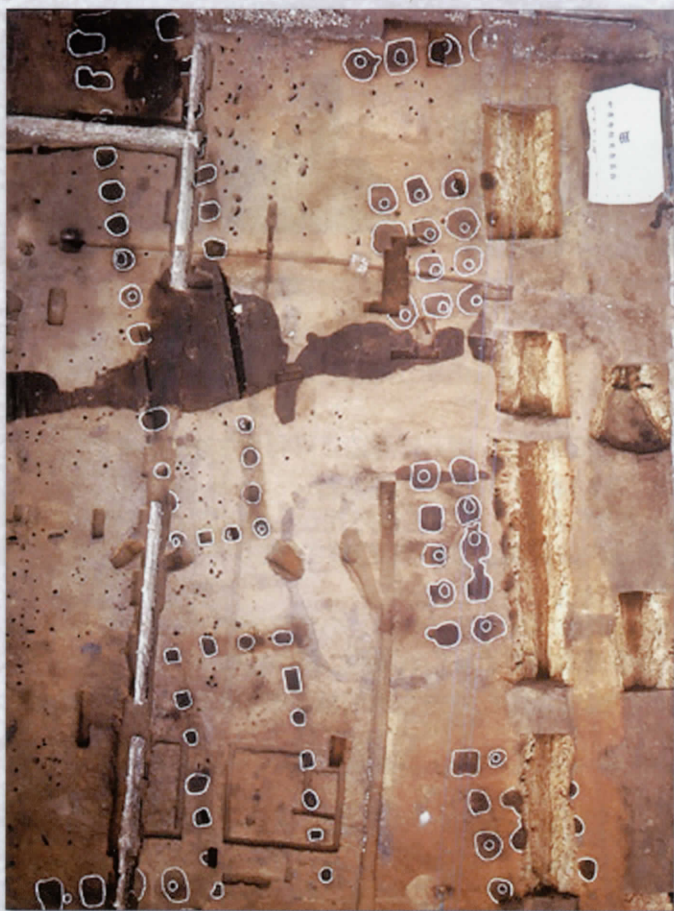
下毛郡のお米を納めた倉庫がずらり！

「官衙（かんが）」とは、大化の改新以降の中央集権国家（奈良、平安時代）における役所のこと。そして郡役所を郡衙（ぐんが）といいます。今の市役所のようなものです。

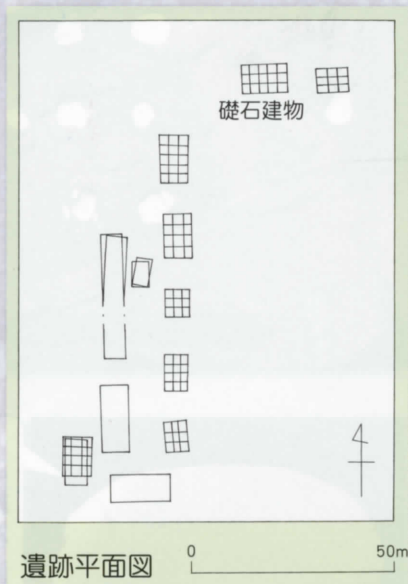
郡司（ぐんじ：今の市長）が政務をとる中心施設を郡庁といい、税金としてのお米などを収納する倉庫群が正倉（しょうそう）です。

長者屋敷官衙遺跡は、下毛郡衙の正倉跡と考えられています。8世紀中～10世紀初めの遺跡です。

当時中津市は下毛郡と呼ばれていました。現在の中津市は、旧中津市、三光村、本耶馬溪町、耶馬溪町、山国町が合併して中津市になりましたが、これは古代の下毛郡とほぼ同じエリアです。



焼けて炭化した米



遺跡平面図

●真北を向いて整然と並ぶ倉庫群

長者屋敷官衙遺跡には、柱の太い、大きな建物がL字型に並んでいました。全部で14棟。低く細長い側柱建物と、一間ごとの格子目の交点全てに柱がある高床式の総柱建物です。

収納した米の重みに耐えるため、大きな柱を使用していました。最も大きな総柱建物は7.2m×11.7mで床面積は84㎡の礎石建物でした。これらは下毛郡から集めた米を納めた、下毛郡役所の倉庫群です。

●地元に残る長者さん伝説

実は地元には、昔から長者伝説がありました。

「この土地を掘ると焼けた米がたくさんでる」

→「昔、長者さんの米倉が並んでいたに違いない」

そのため、「長者屋敷」という字名になりました。

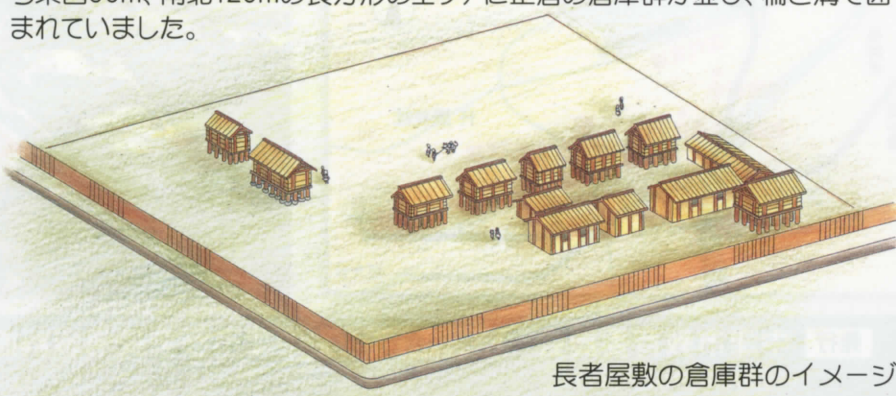
発掘してみると、伝説のとおり、倉庫跡がずらりと並び、炭化したお米が大量に出土しました。

長者さんの屋敷ではなく、下毛郡衙の倉庫群が奈良～平安時代に何度も火災にあった跡だったのです。

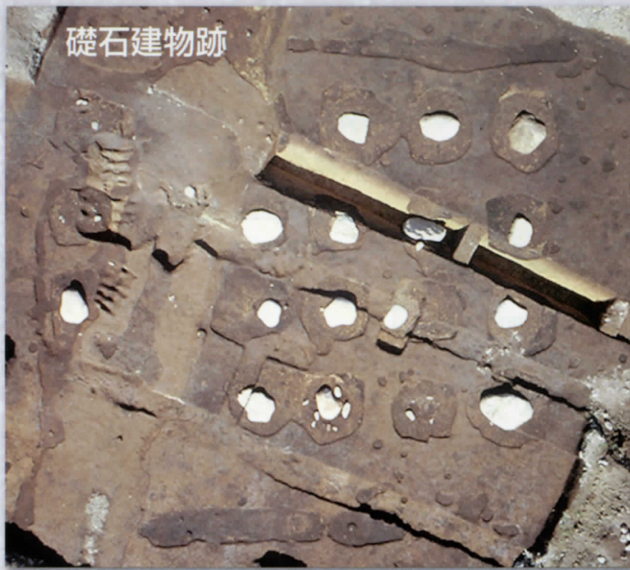
柱穴の直径は1～2m。柱の太さは直径40～60cmです。人が立っている場所が柱になります。



遺跡は官道（古代の幹線道路）から約600m南の台地の突端にあります。220m四角の範囲に古代の役所施設が広がっていたと考えられます。そのうち東西90m、南北120mの長方形のエリアに正倉の倉庫群が並び、柵と溝で囲まれていました。



長者屋敷の倉庫群のイメージ



礎石建物跡

●郡衙の正倉に礎石建物が!

長者屋敷では、8世紀中～後半に建てられた掘立柱建物の内1棟を、9世紀には礎石建物に建て替えていました。穴を掘っただけのものよりも、重さに耐えられるようになっており、米を長期保存するための倉として利用されたようです。

柱の下に石を置いた礎石建物は、掘立柱建物よりもグレードが高く、主に国府や寺に建てられました。特に関西以西では郡衙に建てられることはほとんどありません。

九州の郡衙正倉跡としては、礎石をもった正倉の初めての本格的調査例として注目をあびました。

●やっぱり出た!文字資料

遺跡からは、丸い硯(円面硯)の破片や、墨で文字を書いたお皿などが出土しました。古代、文字を書けるのは役人や僧侶でした。文字に関わる資料が出土すると、役所かお寺の可能性が高まります。この発見は、長者屋敷官衙遺跡を役所の遺跡と判断する重要な証拠となりました。



この礎石の直径は約1m。石の表面に注目!直径約60cmの柱が建っていた丸い痕跡が見えますか?

文字を書いた土器



円面硯の破片



私たちは“古代のまち”に住んでいる

古代のメインストリートだった官道は、県道663号(万田・四日市線)となり、多くの車が通行しています。官道沿いには、長者屋敷官衙遺跡の他にも古代遺跡が分布しています。

相原 廃 寺・・・豪族が建立した古代寺院跡。二つの礎石が残るほか、他の礎石は周辺で再利用されています。

相原山首遺跡・・・相原廃寺のある集落を見下ろす高台にある、寺を建てた豪族達の墳墓群。下毛郡衙の郡司を輩出した一族の累代墓と考えられています。古墳時代から現代まで、墓地・火葬場として利用されており、風の丘葬斎場の敷地内に古墳公園として整備されています。

沖代地区条里跡・・・古代、いわゆる圃場整備が行われ、方形の水田がうまれました。官道から中津駅までの範囲で、道路が基盤の目状になっているのはこの名残です。この水田地帯から収穫した米も官道を通り長者屋敷官衙遺跡の倉庫群へ納められたことでしょう。

豪族達が建立した寺、彼らの墓、役所、水田、道路など、歴史をたどっていけば、私たちが千数百年前の古代の都市の中でくらしていることを感じる事ができるでしょう。



沖代地区条里跡

古代官道

倉庫群

長者屋敷官衙遺跡